

ねん がつ とおか  
2020年10月10日

ねんかんだい しゅじつ  
年間第28主日

きくち いさおだい しきょう せつきょう  
菊地 功大司教 ミサ説教

「<sup>しょみんぞく</sup>諸民族の<sup>こころ</sup>心と<sup>せいしん</sup>精神の<sup>わかい</sup>和解によって<sup>さいご</sup>最後には<sup>しん</sup>真の<sup>へいわ</sup>平和が<sup>せかい</sup>世界に<sup>かがや</sup>輝くよう、<sup>さいわ</sup>幸いなるお  
とめ<sup>たす</sup>マリアの<sup>ねが</sup>助けを<sup>ねが</sup>願うために、<sup>じゅうがつ</sup>十月に<sup>とな</sup>ロザリオを<sup>つよ</sup>唱えることを<sup>すす</sup>強く勧めます」

<sup>きょうこう</sup>教皇<sup>ろくせい</sup>パウロ六世が<sup>ねん</sup>1969年に<sup>はつびょう</sup>発表された<sup>し</sup>使徒的<sup>とできかんこく</sup>勧告「<sup>レクレンス・メンシス・オクトー</sup>ベル」は、<sup>はじ</sup>そう始まっています。

あらためて<sup>い</sup>言うまでもなく、<sup>がつ</sup>10月は<sup>つき</sup>ロザリオの月であります。<sup>がつなのか</sup>10月7日には<sup>ロザリオの</sup>聖母の<sup>せいぼ</sup>祝日があり、<sup>しゅくじつ</sup>また<sup>きょうかい</sup>教会は<sup>でんどうてき</sup>伝統的に<sup>がつ</sup>10月に<sup>いの</sup>ロザリオを<sup>すす</sup>祈ることを<sup>すす</sup>勧めてきたこと  
もあり、<sup>きょうこう</sup>教皇<sup>じゅうさんせい</sup>レオ十三世によって<sup>がつ</sup>10月が「<sup>つき</sup>ロザリオの月」と<sup>さだ</sup>定められました。

ロザリオの<sup>きげん</sup>起源には<sup>しょせつ</sup>諸説ありますが、<sup>じゅうにせい</sup>十二世紀後半の<sup>せいじん</sup>聖人である<sup>せい</sup>聖ドミニコが、<sup>とうじ</sup>当時の  
<sup>いたん</sup>異端と<sup>たたか</sup>闘うときに、<sup>せいぼ</sup>聖母からの<sup>けいじ</sup>啓示を受けて<sup>う</sup>始まったと<sup>はじ</sup>伝えられています。<sup>がつ</sup>10月7日の  
<sup>せいぼ</sup>ロザリオの<sup>きねんび</sup>聖母の<sup>ねん</sup>記念日も、<sup>かいせん</sup>1571年の<sup>ぐん</sup>レパントの<sup>たい</sup>海戦での<sup>ぐん</sup>オスマン・トルコ軍に対する  
<sup>しょうり</sup>勝利が、<sup>いの</sup>ロザリオの<sup>いの</sup>祈りによってもたらされた<sup>ちな</sup>とされていることに<sup>さだ</sup>困んで定められてい  
ます。そう<sup>みみ</sup>いったことだけを<sup>たたか</sup>耳にすれば、<sup>ぶき</sup>ロザリオは<sup>き</sup>戦いのための<sup>き</sup>武器のようにも<sup>き</sup>聞こ  
えてしまいます。もちろん、ある<sup>い</sup>意味、<sup>しんこう</sup>ロザリオは<sup>たたか</sup>信仰における<sup>どうぐ</sup>戦いのための<sup>い</sup>道具とも<sup>い</sup>言  
えるのかも<sup>し</sup>知れませんが、<sup>れき</sup>歴史的<sup>か</sup>背景が<sup>げん</sup>変わった<sup>げん</sup>現代社会にあっても、<sup>しんこう</sup>信仰を<sup>まも</sup>守り<sup>ふか</sup>深  
めるために<sup>じゅうよう</sup>重要な<sup>おも</sup>存在であると思ひます。

とりわけ<sup>ことし</sup>今年のように、<sup>かんせんしょうかくだい</sup>感染症<sup>じたい</sup>拡大の<sup>め</sup>事態にあつて、<sup>み</sup>目に見える<sup>かたち</sup>形で<sup>きょうかい</sup>教会に<sup>あつ</sup>集まるこ  
とが<sup>でき</sup>出来なかつたり、<sup>せいたいさいぎ</sup>聖体祭儀に<sup>とも</sup>共にあずかることが<sup>かな</sup>適わないという<sup>ひじょうじたい</sup>非常事態において  
は、<sup>しんこうじたい</sup>まさしく<sup>きき</sup>信仰自体が<sup>い</sup>危機に<sup>か</sup>さらされていると言つても<sup>か</sup>過言ではありません。そうい  
う<sup>しんこう</sup>信仰の<sup>きき</sup>危機にあるからこそ、<sup>いの</sup>祈りによる<sup>れんたい</sup>連帯と<sup>いっち</sup>一致は<sup>じゅうよう</sup>重要ですし、<sup>い</sup>その意味で<sup>い</sup>ロザリ  
オは<sup>しんこう</sup>信仰の<sup>きき</sup>危機に<sup>たむ</sup>立ち向かう<sup>ぶき</sup>武器であるとも<sup>い</sup>言えるでしょう。

これまで<sup>なが</sup>長いことわたしたちは、<sup>にちよう</sup>日曜に<sup>きょうかい</sup>教会に<sup>あつ</sup>集まるのが、<sup>きょうかい</sup>教会の<sup>いっち</sup>一致の<sup>ひょうげん</sup>表現であ

ると思っておりました。だからこそ、さまざまな事情で教会に来られない人たちや、洗礼後に教会を離れていった人たちに、日曜日に教会に戻っておいでなさいと呼びかけてきました。なぜなら、集まっている教会にこそ、共同体の一致があると思っていたからです。

しかし今回の緊急事態は、その集まることを不可能にすることで、それでは教会共同体の一致とはどこにあるのだと、わたしたちに問いを投げかけてきました。まさしく、教会の一致はどこにあるのでしょうか。共同体はどこにあるのでしょうか。

わたしたちの信仰は、もちろん個々人の信仰、すなわち一人ひとりに固有のイエスとの出会いの体験による信仰が基礎となっていますが、だからといって教会の信仰とは個々人の信仰の単なる寄せ集めではありません。わたしたちはそれぞれが信仰を深めつつ、共同体において一致することで、共に神の民を形成し、共に信仰の旅路を歩んでまいります。わたしたちは、神の民です。

ですから、普遍教会の一員であり、教区共同体の一員であり、小教区共同体の一員であるという意識は、わたしたちの信仰にとって欠かせない共通認識です。

共同体における一致の意識は、もちろん物理的に一緒になることも含まれていますが、それだけにとどまるものではありません。そこには霊的な意味での一致が不可欠です。不可欠と言うよりも、霊的な意味での一致がなければ、神の民は存在できません。相対的な価値判断が蔓延する現代社会にあって、あれもこれもどれでもよいという単なる数だけの集まりでは、霊的な一致は成り立ちません。身勝手な自己主張は、分裂しか生み出しません。わたしたちは、唯一の神に結ばれることで、霊的に一致して神の民となり、そしてはじめて教会共同体は成立します。

霊的一致をもたらしてくれるのは、わたしたちの祈りにおけるきずなであります。その意味で、聖母マリアを通じて祈るロザリオの祈りには、重要な意味があります。

教皇パウロ六世は、使徒的勧告「マリアーリス・クルトゥス」で、「(マリアが)信仰と愛徳

との両面において、さらにまた、キリストとの完全な一致を保ったという点において、教会の卓越した模範であると仰がれている」(16)と指摘します。

その上で教皇は、「アヴェ・マリアの祈りを繰り返して唱え続けてゆくことによって、ロザリオはわたしたちに今一度福音における基本的に神秘であるみことばの受肉を提示してくれる・・・福音の祈りである」(44)と述べておられます。

ロザリオの祈りを唱えることで、わたしたちを結び合わせているキリストの体における神秘的な一致へと導かれ、どこにいても、いつであっても、ひとりでも、複数でも、ロザリオを唱えることで、わたしたちは聖母マリアがそうであったように、キリストの体において一致することが出来ます。

教皇ヨハネ・パウロ二世は「教会にいのちを与える聖体」において、「信者は洗礼によってキリストのからだの一つにされますが、この一致は、聖体のいけにえにあずかることによって常に更新され、強められます」と記します。(22)

その上で教皇は、聖体の秘跡における一致によってキリスト者は、「すべてのひのあがないのために、キリストによってもたらされた救いのしるしと道具、世の光、地の塩となる」と指摘します。

したがってわたしたちは、御聖体の秘跡にあずかることによってキリストのからだの一つとした共同体となります。その共同体の一致は、祈りによってつなぎ合わされる霊的な一致によって、さらに強められ、わたしたちはどこにいてもキリストの体の一部として互いに支え合っていることを自覚しながら、世の光、地の塩として福音をあかししながら生きてまいります。

パウロは、よいときにあっても困難なときにあっても、「いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっている」と記していました。どのような状況にあっても動じないパウロを支えていたのは、霊的にキリストの体と一致しているとの確信であり、それを支えている信仰共同体における兄弟姉妹との霊的一致の確信であったと思います。パウロの

「秘訣」は、共同体の祈りの力にあります。

マタイ福音に記されている婚宴を催して人々を招待する王のように、主は霊的な力に豊かに満ちた祈りを用意してわたしたちを招いてくださいます。残念ながら、往々にしてわたしたちは、婚宴の宴のように素晴らしく用意されている教会の祈りの伝統に目を向けず、畑に出かけたり商売に出かけた招待客のように、自分の現実社会での都合を優先させて、そこから逃れようとしています。わたしたちが祈りを通じて霊的に一致するように、またその一致を通じて共同体として社会のなかであって、世の光、地の塩となるように、力ある豊かな祈りは、わたしたちのために用意されています。豊かな祈りの宝を、見失わないようにしましょう。

聖母マリアを通じて人となられた神のみ言葉である主イエスへと導かれ、キリストの体に一致し、互いに支え合い、福音をあかししていくことが出来るように、招いてくださる主に背を向けないようにいたしましょう。